土浦発

未来への伝承 ⑨⑦

武田二十四将　土屋右衛門尉所持
―「影法師」の刀―

「影法師」の刀は、土屋家の祖先である土屋右衛門尉昌次が所持していたもので、土浦藩主に代々相伝されてきたものです。刀を手で持つ部分である茎には、銀象嵌で「右衛門尉持之」、金象嵌で「影法師」と銘が彫られていることから「影法師」の刀と呼ばれています。

「影法師」とは、光が当たって地面に映った人の影のことを一般にいいますが、戦国時代での「影法師」の意味は、影武者を指すものと言われています。綿密な時代考証で知られる黒澤明監督の映画「影武者」では、近習頭土屋平八郎（昌次の幼名）が登場し、影武者のことを「影法師」と呼んでいます。

昌次は幼少の頃より武田信玄に使え、甲斐武田二十四将の一人として知られています。昌次は有名な川中島の戦で敵味方が入り乱れる中、信玄の側を離れずに警護したことで軍功を得て侍大将となっています。また、信玄の死は遺言により秘喪とされ、3年後に荼毘に付されたのは昌次の屋敷でした。信玄と昌次の関係はかなり親密なものがあり、昌次が信玄の影武者を育成するのに深くかかわっていたのではないかと想像されるのです。

表銘（金象嵌）「影法師」
裏銘（銀象嵌）「右衛門尉持之」

では、この刀はどのような使われ方をしたのでしょう。一つは影武者の育成係として昌次が所持を許された刀であるとの説と、もう一つは、戦時において信玄と偽者の区別が分かるように昌次が影武者に帯刀させたものであるとの説があります。信玄の影武者はあまりにも本人に似ていたことから家臣であっても見分けがつかなかったと言われています。もし、信玄が討たれた場合、本人か偽者かの違いを乱戦時において判断するには、刀の目釘を外して茎に「影法師」と見れば偽者だと分かるわけです。

昌次は天正3（1575）年、長篠の戦で三重の馬防柵を二の柵まで打破り、三の柵において名告りを上げて一騎打ちを挑みましたが、敵の応答がなく突撃したところで滝川一益の鉄砲隊に一斉射撃を浴びせられて31歳で討死しています。後を継いだ弟の土屋惣蔵昌恒は、武田勝頼夫妻の自刃の時間を稼ぐために「片手千人斬」で名を馳せた勇将です。昌次・昌恒兄弟は武田家に最後まで忠義を貫いたことで敵味方ともに広く知られました。後に昌恒の遺児平三郎が徳川家康に見いだされ、2代将軍となる秀忠の近習となり、忠直と名を改めてやがて上総国久留里藩2万石の大名となります。その忠直の次男として生まれた数直が土浦藩土屋家初代となり11代まで続きます。

土屋右衛門尉
「武田二十四将図」より

昌次が所持していたこの「影法師」の刀は、土浦土屋家のルーツを語るうえで最も代表的な家宝といえるでしょう。それ故に「影法師」の刀は、歴代の藩主によって代々受け継がれ、土屋家刀剣の中でも特に重要視されていました。

この刀は、特別公開「土屋家の刀剣」（11月13日（日）まで）展で公開しています。

問 市立博物館（☎824・2928）